

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 「暦象新書」および志筑忠雄の研究史(3) 日本史家による評価について(1)

著者	大森 実
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	25
ページ	28-37
発行年	1973-02-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10207">http://hdl.handle.net/10114/10207</a>

## 『曆象新書』および志筑忠雄の研究史 (三)

——日本史家による評価について(一)——

大 森 実

## 一、伝記的研究

## 二、文化史的研究(本節半ば迄本号掲載)

## 三、最近の研究

## 四、結び

## 一、伝記的研究

明治二十八年六月『東洋学芸雑誌』第一六五号に發表された狩野亭吉氏の「志筑忠雄の星気説」という論文は、日本人に志筑忠雄という人物とその独創的な宇宙起源に関する星雲説の内容を教えるものであった。これについては既に述べたので、ここでは大槻如電翁の記事から始めたいと思う。

明治四十年刊行の大隈重信編『開国五十年史』上巻に大槻如電は「欧州學術伝來史」を執筆して、蛮学・蘭学の發達に関する史実を通観しているが、その中に

同じ通弁員に(この引用文の前に本木の天文書翻訳の記事がある。大森註)中野柳圃(志筑忠雄のこと。大森註)と云へるは、夙く其職を辞して、是も欧州星曆の書を訳述せんと欲し、閉戸従事する十年、竟に曆象新書を著はしたり(寛政十年、一

千七百九十八年)。この高等専門学なる星象究理の書を読み破らんと刻苦せしが、了解する能はざること多きに逢ひ、寢食を廃せし凡そ幾回なることを知らず。然るに其困苦の極まり、和蘭の文辞に語格・詞品のある事を看破し、六格九品を自定して一つの文典を作りたり。然れども中野は世人と更に交通せざればかゝる抄訳も知る人なかりしが、大槻の子大槻玄幹の見現はす所となりて、和蘭文法は世に伝はりたり。<sup>(2)</sup>

(引用文は、漢字については当用漢字に訂正したが、仮名遣いは原文のままとした。以下、引用文について同様に取扱う。)前章に記せし中野の文法書は、大槻子長崎遊学中、中野を訪ひ、始めて其發明あるに驚き、通弁員中に伝へ、馬場・本木<sup>(3)</sup>・吉雄三世の三子を伴ひ、同じく中野の教を受く。是れぞ和蘭の語格文法の世に現はれたる初めなる(文化元年 一千八百四年)と述べ、中野の『曆象新書』訳出とその苦心・蘭語文法の発見とその流布の端緒を明らかにした。蘭語文法発見の功を述べたのは、この文が最初であろう。更に大正二年刊行の『文明源流叢書』第一巻には大槻文彦述「日本文明の先駆者」がある。そこには志筑について紹介がある。大槻文彦氏は、江戸を中心とした蘭学の

發達を 一、洋学の濫觴 二、青木文藏 三、前野良沢、杉田玄白 四、大槻玄沢 五、玄沢門下の諸名家 六、蘭学の系統の順に述べ、七、長崎の蘭学で

長崎の通辭が洋書を読むことを許されてから、西善三郎、本木栄之進、吉雄耕牛などといふ学者が出来て来た。其中に中野柳圃と云ふ人がある。此人は非常な篤学な人で、蔵の中に二十年も這入って居って更に世間へ出ない。さうして天文に関する「曆象新書」といふ書を翻訳した。最初天文の書物を読まうとしても中々分らない。そこで熟々考へた。蘭書を読むには先づ其文法語法を知らなければ読めるものでない。文法語法が第一であると氣がついて「和蘭詞品考」といふ文法書を著した。

之れは、西洋の文法書を見たのでも何でもない。<sup>(A)</sup>和蘭の書物を読むには斯うしなければならないと云ふ、自分の新發明であります。此の中野の文法が出てから和蘭の学問は一変した。<sup>(4)</sup>傍点は大森

と、志筑の文法を高く評價した。しかし傍点部Aについては後に疑問が提出される。

上に述べた大槻文彦の記事も『曆象新書』に触れてはいるものの蘭文法自覚についてより多くが語られている。しかし大槻如電『新撰洋学年表』大正十五年(明治十年の『日本洋学年表』の大改訂版)には、志筑関係の記事も多数見出される。すなわち本木氏への入門、蘭文法自覚、『求力論』、『火器発法伝』、『魯志重志附録』、『八円儀』、『和蘭詞品考』、『鎖国論』、『日蝕絵算』、『二国会盟録』、『曆象新書』、志筑の門弟達 など、他の蘭学者と同

『曆象新書』および志筑忠雄の研究史(三)(大森)

じく志筑についても豊富な記事が見られる。ここでは『曆象新書』についての記載を見ると、

六月曆象新書上編 志筑雄訳 原書は英國人ケール所著天文書なり。二十年の辛苦にて記述すると云ふ、其例言に予は一個の舌人にて僅かに蘭書の大意を解する事を得るのみ。和漢の典籍に暗ければ如何で天学の何者たるを知らん。唯訳文の拙にして読人詳かに原文の意を理会するの難からん事を恐る故に不得已聊所聞を雜へ其言の天経或間、曆算全書に及ぶが如し(寛政十年の条)

十月曆象新書中篇 志筑忠雄訳 上篇は実動の躰を論じ此篇は実動ノ理ヲ論ズ、上篇ノ大意ハ地動ニアリ此篇ノ大意ハ衆動一貫ニアリ

元氣屈伸 動力 常動常靜 加力変速 重動 画輪速力無増減 旋輪躰動法 赤道遠心力張本 赤道遠心力 仮星太陰比例 諸曜行道真形 星行応三角積起源 正椅二円一周適等 求心力疑問 諸氣障礙 薄氣 衆動一貫比例起源

首ノ元氣屈伸一編ハ漢ト西トヲ考ヘテ予カ言ヘルナリ(寛政十二年の条)

十月曆象新書下篇 志筑忠雄訳 求心常路説 異通分判説 例言、近來西域ニ一奇士アリ尼通ト云フ 是人深ク度数ノ学ヲ究メ広ク天地ノ理ニ通ズ、其名諸國ヲ震動ス 是編元來尼通ノ旨ニ出タリ 唯其数理起源ノ委曲ヲ述テ人々学ヒ易キニ至ラシムルハ奇兒ニアリ予微力ヲ計ラズシテ是ガ解ヲ作テ本文中ナル難題ヲ読ムノ張本トスル者上卷コレナリ云々○混沌分判説ハ古今特見とて識者間賞嘆

せらるゝ者（後略）（昭和二年の条）

以上の記事は『曆象新書』の例言から一、二を引用し、また各章節の標題を列記し、きわめて簡単な解説を加えるなどしている。これは龐大な史料に基づく記述が豊富に盛られている『新撰洋学年表』の特徴でもあって、後の研究の手引となっている<sup>(5)</sup>。

こうした伝記的研究の結果は、他の観点からの研究に材料を提供するものであって、家伝の伝説と書籍解題の記事をわれわれに与えた大槻氏一族の功績は、『曆象新書』の研究史においても高く評価されるべきであらう。

これとはほぼ同じ傾向を持つものに古賀十二郎、岡村千曳がある。これらの人々の文には大槻一族のするように話の持つおもしろさはないが、確実な史料に基づいた手堅さが感じられるのである。特に古賀は特筆されてよい。

古賀氏は長崎の地方史家であるが、蘭学史学者と伍してひけをとらなかつた。その『西洋医術伝来史』や『長崎市史洋学篇』<sup>(6)</sup>など名著として有名である。大正十五年四月に『長崎と海外文化』が刊行されたが、それは当時の長崎市長錦織幹のことばによれば長崎市史を簡約にしたものであった。上編は永山時英の筆によるものであるが、下編は古賀氏により執筆され総数九四頁語学・天文学・医学・博物学・物理化学其他・氣象観測・写真・印刷・工芸・特殊なる行事・卓袱料理其他・長崎料理と菓子<sup>(7)</sup>の十二章を含んでいる。そして天文学の章で長崎に於ける天文学の発達、本木仁太夫の業績を述べた後で

志筑忠雄は天明二年に著せる万国管窺（編者所蔵志筑忠雄自筆稿本）に於てニ

トンの学説に触れ、尋いで寛政より享和へかけて曆象新書を發表した。そしてその著述に於て星氣説を述べてゐるが、その学説は泰西の天文学者ラプラーズや哲学者カントなどの星氣説と併せ称すべきもので実に徳川時代に於ける日本理学界の誇りとすべきものである。

なほ志筑氏は日本数学、物理及び語学の歴史に於ても特筆すべき人物であつた。前記著述の外四維図説、求力論、三角提要秘算、八円儀、奇児伝日蝕絵算等を挙げておきたい。（中略）本木志筑両氏の開拓によりて爾後日本の天文学は著しく進歩した。しかし長崎に於ては、爾後両氏に比べて遜色なき天文学は現れなかつたやうである。<sup>(7)</sup>

と述べて、志筑が日本科学史上重要な人物であることを説いたが、また『西洋学家訳述目録』<sup>(8)</sup>嘉永五年・『新撰洋学年表』のいづれにも現われなかつた『万国管窺』、『四維図説』、『三角提要秘算』の存在が説かれたことは注目し、そしてこれらの更に充実したものをわれわれは、昭和十八年雑誌『科学朝日』一月号の「志筑忠雄」に見出すのである。そこで古賀氏は、理学者としての志筑について家系・生涯、学統、『曆象新書』をはじめとする十種の著訳の解題、門弟の各項について敘述しているが、当時までの彼の研究がよく整理されほとんど完全に近い形で提出されている。しかも大槻如電や後述する板沢武雄・林鶴一両氏の諸研究をも含めたそれまでの研究には見られない新事実や新見解を確実な史料に基づいて述べている。その若干を挙げれば『曆象新書』中編下巻の記事に基づいて、志筑が光学書を某氏から借用

閲覧したこと、ケイル原本の諸版について記したこと、『曆象新書』の吉村迂斎による序文（古賀氏執筆当時現存したもので現在は所在不明）と南部処士芳沢武卿の序文に相違があること、『万国管窺』の記事により天明二年には既にケイル全書を読んでいたこと、『火器発法伝』はケイル全書第十六巻中に在るものを訳したものであること等である。更に昭和四十一年刊行の『長崎洋学史』上巻において、“志筑忠雄及び其著述”・“志筑忠雄の門人”の項を設け、その生涯・著訳書・門人と志筑の影響について三十頁にわたって実証的にまた詳細に述べた。これは、現状にあっては志筑研究の出発点となるべきものであるが、これらの記事の中で『万国管窺』『計意留求力論』『火器発法伝』『八円儀』『曆象新書』『鎖国論』『曆象必備』など十六種の著作の解題に注目すべきであろう。

古賀の業績とは別な事実を加えた者は岡村千曳氏である。岡村は、昭和二十五年九月『早稲田学報』復刊第四巻第八号に載せた“西詩邦訳の濫觴”<sup>(9)</sup>という論文の中で、志筑のラテン詩漢訳と『蘭詩作法』を紹介した。前者については

ケンベルの「日本志」第三巻の末に「日本と対外貿易」と題し鎖国の可否を論じた一章がある。これを享和元年に志筑忠雄の翻訳したものが「鎖国論」として世に知られている。その中に羅旬詩「二行の訳が見えている。原文はヴィルギリウスの農事詩“Georgics”第一篇より引用した次のようなものである。

Hic segetes, illic veniunt felicius Uvae  
India mittit Ebur, molles sua Thura sabae

『曆象新書』および志筑忠雄の研究史(三) (大森)

此有饒禾稼 彼有美蒲萄  
印度出象牙 沙巴産名香<sup>名地</sup>

（中略）訳者（志筑を指す大森註）はこの詩に注して、訳詩の前二句、即ち原文第一行は「古の詩人ヒリギリユスが語に本づけりと見えたり」と言っている。恐らく彼が翻訳の際に参考したスラールの羅旬書中にヴィルギリウスの句として引用されてあるのを見て、これを知ったのであろう。<sup>(10)</sup>

と述べ、後者については、伊達重村夫人の還暦を祝うために当時長崎に留学中の大槻平泉が玄沢の指唆の下に、何かの賀詞を献げようとして師の志筑忠雄に相談し、その周旋によって生まれた平泉筆『三国祝章』の目次中に、

蘭詩作法 大日本長崎<sup>前和蘭</sup>通詞 志築忠雄

とあることを指摘し、この部分と他の三枚の挿絵とは脱落して白紙となっているために内容不明であるが、稿本末にある平泉の、“論三国歌詩体制異同”から志筑の説の一端を窺うことができる。岡村はこれについて次のように解説している。

次に大槻清準即ち平泉の「論三国歌詩体制異同」と題する一文の大意を紹介する。原文は漢文で頗る難解のものである。（中略）「大意」和蘭の詩には数体ある。私はその一を志築忠雄に聞いた。それによると、句（lineの意味）は、音節から成っている。音節は字を結合して出来たものである。それ故、音節を整えて句が成り立つ。句には、十三音節のものと十二音節のものがある。上二句十三音節、下二句十二音節の詩を豪傑体（helben digt = heroic poem）と呼ぶ。これが普通である

が、或は音節の多い方の二句を分つてその間に音節の少い二句を置くこともある。

また聞く所によると、音節には長と短がある。長音節と短音節とを合せたものを一尺（韻脚または音歩の意味）といひ、六尺はこれを押韻句（Stande vers）と呼ぶ。六尺有半は帶韻句（Sleepende vers）といはれる。

こうして志筑はラテン詩邦訳の最初としての名譽を担うこととなったのである。また岡村氏が『曆象新書』下編の完成を享和二年とせず享和三年とすることは、それを裏付ける史料があることと思われるが、その根拠について私は未知である。

現在においては、本節で述べてきたような研究の方向を進めてきた者は、古賀氏門下渡辺庫輔氏と神田茂氏である。

昭和三十三年渡辺氏の『阿蘭陀通詞志筑氏事略』が出版されたが、本書は『阿蘭陀通詞本木氏事略』『阿蘭陀通詞檜林氏事略』『阿蘭陀通詞加福氏事略』と並んで、オランダ通詞諸家に関する精細な研究の一つである。全七二頁中三十五頁を費して志筑忠次郎（忠雄）について述べている。その文は、生涯と著作の解題・生没年・門弟に分かれるが、著作解題がもつとも長い。そこには江戸時代の史料の他に明治期の狩野論文以後およそ志筑について触れた文章がすべて網羅摘記されているといつても言い過ぎではなく、渡辺の所蔵書に基づく記述と一体になっている。渡辺はこの著書により二十四種の志筑の著作を紹介し、二十一種を解説した。その中には彼によつてはじめて紹介された『鈎股新編』が含まれている<sup>(13)</sup>。

神田氏は、昭和三十六年四月に行われた蘭学資料研究会の席上、<sup>(14)</sup>「志筑忠雄の著訳書」と題して研究発表を行い、各種の目録を調査した結果を整理して志筑の著作三十種を挙げておのおのについて、所在、簡単な内容・成稿年月などを解説し、それらを天文十三種、語学五種、地理四種、数学四種、兵学二種、雑二種に分類した。そしてそれら三十種の著訳書の中著作年代の不明のもの十二種、内容不明のもの五種を指摘した。

この渡辺・神田両氏の二論文は、今後の志筑研究に際してはつねに研究手引として参考されるべきであろう。

この他、新しい史料や新見解は含んでいないが、森銑三氏の「独力で星雲説を唱えた物理学者中野柳圃」<sup>(15)</sup>は、志筑忠雄という人物を一般人に知らせる点では大きな役割を果していると思われる。

## 二、文化史的研究

以上記してきたように、志筑忠雄の伝記的研究は着実な発展を遂げてきたが、これと同じく実証的な手堅さを持ちながらも日本史の一環としての蘭学史という観点から、志筑を日本史上に位置づける観点が昭和初頭から起きてくる。これは文化史のあるいは思想史的考察とすることができる。その先頭をきるものは板沢武雄氏である。オランダ留学を終えて昭和四年に帰朝した板沢氏は、昭和七年「蘭学の意義と蘭学創始に関する二三の問題」という論文を『歴史地理』誌上に四回にわたって連載した。この論文は、日本とオランダ両側の史料を豊富に駆使して、蘭学をまず南蛮学（蛮学）・洋学から区別し、その内容を、(1)医学・本草学、(2)天

文学・暦学・地理学、(3)兵学に分けてそれぞれの発達を論じた。その文中四箇所志筑について述べているが、当然志筑の業績のみを論じているのではない。

まず蘭学の意義を論じて、蘭学とは、「解体新書形体名目編を翻訳せられた会業の時（一七七一―一七七四）に新につくり出した新名であつた<sup>(16)</sup>」とし、長崎が西洋學術研究の淵藪ではあつたが、その担い手と蘭通詞の本職は通訳・貿易官にあり学問はその職務に随伴した余技又は副職であつて、その一例として志筑をあげ、『曆象新書』の凡例中から「予は一箇の舌人也しのみなれば、僅に書蘭の大意を解することを得れども、浅学薄聞、和漢の典籍に暗ければ如何にして天学の何物たることを知るに足らんや」の文を引用して、志筑の学殖の豊富さをたたえながらも結局通詞家の学問は「舌人の学問<sup>(18)</sup>」であり、未だ専門家による本格的なものではないとしている。この引用は例証としてやや不適當の感もあるが、とにかく板沢氏は本格純正の蘭学成立は、江戸に於ける解体新書翻訳にあるとする。

次に本草学の発達を記した中に、宇田川榕菴訳『植学啓原』（天保四年）の首部にある学問の分類を説明している文中、費西加 phisica の一例として

志筑忠雄の曆象新書（寛政十年）は先づ邦人の手になつた物理書の最初のものではあらう。<sup>(18)</sup>（傍点は大森）

と述べ、『曆象新書』について

Oxford 大学の天文学教授英人 Johan Keill の原著を蘭訳した Inleiding tot de ware Natuur-en Sterrekunde of de Natuur

en Sterre-Kundige Lessen. Leiden. 1741 を抄訳して、それに自説を加えたものである。<sup>(19)</sup>と註した。ここにおいて、日本で初めて曆象新書の蘭語原本が紹介された。

第三に天文学・暦学の発達を論じて、長崎に來航する蘭船により輸入された天文関係の書籍・機械類さらにそれに附随した数学の輸入に関して次のように記した。

蘭船によりて輸入された天文に関する書籍機械類は注文書の残りを見ても中々多数に上る。天文関係書籍については東北帝国大学所蔵本（省略）について、理学博士林鶴一氏がアムステルダム<sup>(20)</sup>の数学学会紀要（Nieuw Archief voor Wiskunde）に一九〇五年に寄書されたものがある。

T. Hayashi: A list of some dutch astronomical works into Japan from Holland.

我が国天文学の発達史上前に述べた志筑忠雄の曆象新書はケールの原著の一部分の訳述とはいへ注目すべき著作である。<sup>(20)</sup>

西洋流の天文・暦学の断片的知識ではなく、ほんとうの研究が案外後れてはじめられたと同様に、西洋数学の研究も時代が案外下るようである。前に度々引用した志筑忠雄の曆象新書下巻の算法の条に「三角算は曆算全書に詳なれども、予が伝る所は、奇児の三角算、尼通の直求正弦法、捻辟爾の五件、伝屋爾夫の三角対数表あり」とあるなどは、西洋数学の伝来を考ふる上に見のがすことの出来ない文献の一つであらう。<sup>(22)</sup>

これらの敘述は、昭和八年刊行の『蘭学の発達』<sup>(22)</sup>の中で語学研

究など志筑の別方面の業績に関する記事と一体となり、次のように述べられている。すなわち

同じく通詞出身の志筑忠雄（中野柳圃）の業績である。彼は享保十年生れ、本姓中野、忠雄・忠次郎はその俗称である。阿蘭陀通詞志築孫次郎の養子となり、安永五年稽古通詞を拜命したが、翌年病身の故をもって職を退き、後故あって志筑家を去り、中野を称し、専ら英人ケール Joan Keil の天文書の蘭訳について研究し、苦辛研修二十余年にして「曆象新書」の訳述を完成し、文化三年七月その歿するまでに鎖国論その他貴重な業績を遺し、大槻玄沢をして、その著「蘭訳梯航」中に、和蘭通詞というものありてより古今一人というべしと讃歎せしめた人物である。彼が蘭文の天文書研究中にオランダ語に語格・詞品のあることに着目し、六格・九品に区別して一つの文法書を作り、和蘭詞品考と題した。六格とは、能格・領格・得格・任格・聴格・失格をいう。九品とは、発声詞・静詞・代名詞・動詞・動静詞・形動詞・連属詞・所在詞・歎息詞をいう。彼は詞品考を漫りに人に示さなかった。<sup>(23)</sup>

と蘭語文法の自得をのべ、また別の箇所では北島見信・西川如見の天文・地理研究を敍したあとで、

その後吉雄幸作・本木栄之進（仁太夫）等にも天文学・曆学に関する著述があるが、志筑忠雄（中野柳圃）の「曆象新書」が断然他を圧する存在である。オックスフォード大学天文学教授ヨハンケールの天文書（一七〇〇年成ラテン文）をベルリン王立学士院会員で、ライデン大学の天文・数学の教授であったヨハン・

ルフォス Johan Lulofs が蘭訳して、一七四一年にライデンにおいて刊行したものに拠ったのである。志筑の曆象新書はこの一部分の訳述であるが、単なる翻訳ではなく実に二十年の辛苦研究の末に成ったものであるという。上篇は実動の体を論じ、地動説を論じ、寛政十年六月に成り、中篇は実動の理を論じ、衆動の一貫を説く、寛政十二年十月に成る。下篇は求心常経説・混沌分判説を含み、享和二年十月に成る。下巻算法の条には「三角算は曆算全書に詳なれども、予が伝る所は、奇児（Keil）の三角算、尼通（Newton）の直求正絃法、捻辟爾（Neper）の五件、伝屋爾夫の三角対数表」ありとあるなど、彼の西洋科学研究の用意の周到さとその学殖の深さを窺うに足る。<sup>(24)</sup>

と志筑の科学研究を紹介した。この論文と「蘭学の意義と創始に関する二三の問題」とに於いて述べられた事項、すなわち(1)『曆象新書』が邦人の手になった最初の物理書であろうとしたこと、(2)天文学史上・数学史上の重要な指摘、(3)『曆象新書』の地動説、(4)、同書の蘭語原本の決定等は、同様の論旨を概括的に述べた古賀氏の文が地方出版であったのに反し、中央の学会機関誌に発表されたことにより日本史家に与えた影響は大きいものがあったと思われる。漸く日本史学界に蘭学史研究の本格的成立が訪れようとする当時にあつて、志筑忠雄・『曆象新書』について総括的記事が見られたのである。

しかしながら、『曆象新書』は多くの問題点を持つことが板沢氏によって指摘されながら、それ以後はしだいに地動説の輸入とその思想性に関してのみ云々されるようになる。そしてその傾向



は現在に於いても大きく変わらないと言ってもよいのではなからうか。

昭和十六年発表の板沢氏の論文「江戸時代における地動説の展開とその反動」は、日本における地動説の移植・発展とそれに対する仏教徒からの反対運動を述べているが、(1)中世における日本人の天文学的常識 (2)耶蘇会宣教師の伝えた西洋天文学説 (3)西洋地動説の解説者 (4)积円通の梵曆運動の四節から成っている。第二節においては南蛮学統による西洋天文説は天動説であったことを指摘し、第三節において本木良永、志筑忠雄の業績を、三枝博音校訂『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』・松平家所蔵のオランダ原書・同じく『新制天地二球用法記』七冊中の六冊・板沢氏所蔵の『曆象新書』の原本・『曆象新書』などの根本史料に遡って検討した結果、

本木良永と志筑忠雄とは江戸時代における地動説の開拓者であり、真の意味の解説者であって、世人の好んで云々する司馬江漢や山片蟠桃などは本木・志筑の説の普及者であり信者であるに過ぎないのである。<sup>(26)</sup>

山片蟠桃の「夢の代」巻一に曆象新書天体論と同文の箇所がある。<sup>(26)</sup>

ことを指摘し、本木の『新制天地二球用法記』の原本は

Adams, G.: Gronden der Starrenkunde, gelegd in het zonnestelzel bevatlyk gemaakt in een beschryving v. 't maaksel en gebruik d. nieuwe hemelen aard-globen. M. aanmerk. v. Ploos v. Amstel. Amst. 1770

『曆象新書』および志筑忠雄の研究史(三)(大森)

であると推定した。<sup>(27)</sup>この論文は本木使用のオランダ原本を推定し、一般に司馬江漢や山片蟠桃が地動説の創唱者のように考えられていたことを訂正して本木・志筑を正しく位置づけたもので、これらの所説は、昭和九年の「鎖国および「鎖国論」について」という論文で「鎖国の語が志筑忠雄の鎖国論で始めて使用された」という指摘とともに、その後長く日本史家に継承されている。その例を杉本勲『洋学』(『新講大日本史』14 昭和十五年)をはじめとする講座類や、同「天動説から地動説へ」昭和二十四年、村井益男『洋学論』昭和二十八年の文中に見ることができる。

さて、これら板沢氏の一連の業績により、日本史学界内に蘭学史という分野がしだいに確立されていった昭和初期にあって、当然蘭学の意義が、さらには思想的意義が問題とされなければならないはず、またひるがえってその学問の対象の性質からしてオランダ側原典や蘭学者の伝記に関する研究が行われなければならない。曆象新書の研究に於いても事情は同様であり、後者の問題については既に述べた古賀氏らの研究も有効であったが、そこに一つの寄与をなしたのは日本史家ならぬ数学史家の林鶴一氏であり、前者の問題に関しては阿部真琴氏、高橋碩一氏が登場する。

林鶴一氏は昭和九年に論文「志筑忠雄」を発表したが、「ソレハ志筑ノ曆象新書ノ依拠セル原書ヲ明記シ、且又志筑ノ著ハセル八円儀測量法ナルモノノ原書ヲ指示セン」として執筆されたものであった。この中で林は志筑の主な著訳書として「求力論」「火器発法伝」「曆象新書上編」「八円儀測量法」「西洋天文訣説」「曆象新書中編」「曆象新書下編」「日蝕絵算」の八種をあげた

が、このリストはその後古賀をはじめ諸家の引用するところとなっている。そして『暦象新書』・『八円儀測量法』の蘭語原本について

Keill の Introductio ノ初版ハ一七〇〇ニ出デタルガ、ソノ英語版ハ一七二〇ニ出デ、ソノ和蘭語版ハ合冊トナリテ一七四〇ニ出デタリ、志筑ガ奇兒全書ト称スルモノハ即チコノ和蘭語ノ合冊ナルベシ。

コノ和蘭語版ハ、和蘭国 Leyden 大学ノ教授タリシ Willem Jacob's Gravesande (1688~1741) が Lugdunum Batavorum 即チ Leyden ニ於テ一七四〇ニ出版セルモノナリ。<sup>(32)</sup>

彼レガ寛政十年一七九八ニ訳セル八円儀測量法ノ原書ハ(中略)<sup>(31)</sup>

Cornelis Douwes: Beschrijving van het Octant, 1749  
ナルベシ。<sup>(33)</sup>

と述べた。さらに翌十年一月の論文「平賀源内」<sup>(34)</sup>中にオランダから購入したラテン語・オランダ語の両原本のタイトルを紹介している。

John Keill (1671~1721) : Introductio ad veram physicam et ad veram astronomiam, quibus accedunt trigonometria, dissertatio de viribus centralibus et legibus attractionis, Oxoniae, 1705 Johan Lulofs (1711~1768)

Inleidinge tot de waare natuur-en sterrekunde, of natuur-en sterrekundige lessen van de Heer Johan Keill, M. D. Savilianssch Hoogleeraar in de Sterrekunde te Oxford. Waar

bij gevoegt zijn deszeifs verhandelinge (1) over de platte en klootsche drie hoeks rekeninge, (2) over de middelpunts kragten en (3) over de wetten der aantrekinge, Leiden, 1741<sup>(35)</sup>

さらに林氏は、同論文中で地動説の輸入に関し、中国流の天動説と南蛮人のプトレマイオス流の天動説が対立しているところへ、本木・司馬らのコペルニクス説と志筑のニュートン・ケイル説が繰り出されたと述べている。こうしてケイルのラテン語原本が初めて明らかにされ、またルロフスのオランダ語原本の構成が板沢氏の紹介よりくわしく行われたのである。なおこの蘭語原本の記述は板沢氏のそれよりも二年おくられているのみである。(次号完結)

#### 註

- (1) 拙論『『暦象新書』の研究史』(『科学史研究』No. 68)および『『暦象新書』の研究史(続)』(同上No. 69)を参照。
- (2) 大隈重信編「開国五十年史」上巻 明治四〇年 九一八頁
- (3) 同右 九二〇頁
- (4) 「文明源流叢書」第一巻 一九頁
- (5) 「新撰洋学年表」は後に佐藤栄七氏により大幅に増訂・加筆されて、「日本洋学編年史」昭和四〇年となった。
- (6) これは「長崎洋学史」上巻・下巻・続篇として、昭和四一年〜四三年に刊行された。上巻に付せられた中西啓氏の「後記」によれば「長崎市史洋学篇」は大正年間に執筆を開始し昭和一五年に脱稿したとみられる、という。従って本論文で、以後引用する古賀の文は、「長崎市史

洋学篇」執筆の途次その研究成果が公表されたものと見做すことができるであらう。そこで「長崎市史洋学篇」の記事に基いて研究史が述べられるべきであると考えられるが、それは長期間未刊のままにおかれていて公刊は昭和四一〜四三年であり、また研究史の性格から、これについては後にふれることとする。

- (7) 長崎市役所編「長崎と海外文化」下編大正一五年 二三頁

- (8) 「文明源流叢書」第三巻に収められている同目録には、志筑の著訳として「曆象新書」「助辞考」「四法諸時対訳」「鎖国論」「生前父」「四十五様」「西音発微」をあげている。

- (9) 岡村千曳「紅毛文化史話」昭和二八年に収載。私の引用はこの書による。

- (10) 同右 一一五〜六頁

- (11) 同右 一三六頁

- (12) 同右 一二〇頁に「『曆象新書』（享和三年完成）」とある。

- (13) 渡辺庫輔「阿蘭陀通詞志筑氏事略」昭和三二年 長崎学会叢書第四輯 四一頁

- (14) 蘭学資料研究会研究報告 No. 80

- (15) 森銃三「おらんだ正月」昭和一三年に収載。

- (16) 板沢武雄「蘭学の意義と蘭学創始に関する二、三の問題」(一)『歴史地理』五九巻 第一号 二七頁

- (17) 同右 同頁

- (18) 同右 第五九巻第二号 一五四頁

- (19) 同右 同号 一六八頁

『曆象新書』および志筑忠雄の研究史(三)(大森)

- (20) 同右 同号 一五七頁

- (21) 同右 同号 一五八頁

- (22) 板沢武雄「蘭学の発達」昭和八年(岩波講座「日本歴史」中の一冊)。この論文は「日蘭文化交渉史の研究」昭和三四年に収められている。以下の引用はこの書による。

- (23) 板沢武雄「日蘭文化交渉史の研究」二四〜二五頁

- (24) 同右 二八〜二九頁

- (25)(26) 同右 二五二頁

- (27) 同右 二四七頁

- (28) 杉本勲「天動説から地動説へ」『日本歴史』第一四巻第3号 昭和二四年

- (29) 中央公論社版『新日本史講座』中の一冊

- (30) 林鶴一「志筑忠雄」昭和九年一月 東北帝大文科学会編雑誌『文化』第一巻第一号所載、のちに林鶴一「和算研究集録」昭和一二年に収む。以下の引用はこの書による。

- (31)(32)(33) 林鶴一「和算研究集録」下巻四一八〜四二一頁

- (34) 同右 四五七〜四六二頁

- (35) 同右 四六〇頁

- (36) 同右 四五九頁

(本稿には昭和四十六年度法政大学特別研究助成金による研究成果が含まれていることを記して謝意を表する。)